

名古屋柳城短期大学研究紀要第25号の訂正とおわび

名古屋柳城短期大学研究紀要第25号(2003年度)における論文「情報化社会と教育Ⅱ—電話というメディアとメッセージ—」について、印刷プロセス上の誤りがありましたので正しい論文の頁をここに掲載します。上記論文中P.75の図2・図3の入る場所に誤りがありました。正しくはP.75注18に入ります。右頁と差替えをお願いします。

株式会社 一誠社

1990年、17頁。)

5. Derrida, J. *La Carte Postale*, Flammarion, Librairie FLAMMARION: Paris, 1980. (丹生谷貴志訳、「葉書」より)(抜粋)、『Inter-Communication』0号。
6. McLuhan, Marshall. *Understanding Media: The Extension of Man*, Mc Graw-Hill, 1964 (栗原裕・河本仲聖訳、『メディア論—人間拡張の諸相』、みすず書房、1987年、7頁)
7. 大澤真幸、『電子メディア論—身体メディアの変容—』、新曜社、1995年、30頁。
8. 同上書31-33頁。大澤は、マクルーハンや、オングらの考えにしたがひ、3つの歴史的発展段階に区分した。これを参考に、活字メディアの段階を独立させ4段階とした。
9. 吉見俊哉・若林幹夫・水越伸、『メディアとしての電話』、弘文堂、1992年、195頁。第5章にて水越は電話に関して、歴史的な視点からの研究をまとめる中で、ベルの取得した特許について資料を基に言及している。
10. 同上書、33頁。
11. 同上書、40頁。
12. ナンバーディスプレイが電話器についたことにより、この状況は改善されたかに思える。実は、改善されたどころか新たな気遣いが必要となった。見知らぬ人からの電話ならかまわないが、知人からの電話の場合、電話に選択的に出ないと思われるとかかわり合いにひずみが生じてしまうので、出ないわけにはいかないのである。
13. 吉見俊哉他、『メディアとしての電話』、70頁。若林は、第2章において大学生からアンケートをとり分析している。
14. 大澤真幸、『電子メディア論—身体メディアの変容—』、23-44頁。
15. Freud, S. *Jenseits des Lustprinzips*, Internationaler Psychoanalytischer Verlag, 1920.
16. 大澤真幸、『電子メディア論—身体メディアの変容—』、43頁。
17. 同上書、78頁。
18. 吉見俊哉他、『メディアとしての電話』、152-

153頁。発信通話回数、発信通話時間ともに高い値を示しているのは、大学生、ことに女性の大学生であることがわかる。

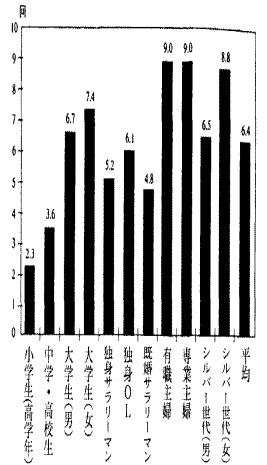


図2 ライフステージのなかの発信通話回数(週当たり)
(注:「シルバー世代」は、60歳以上の男女を指している)
(図説 日本人のテレコム生活 1991 NTT出版、1991より作成)

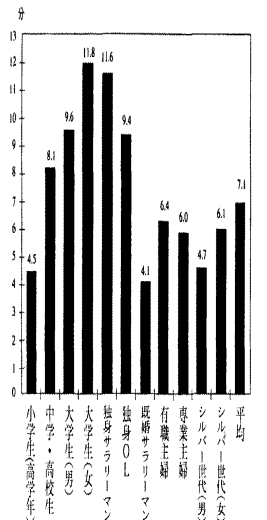


図3 ライフステージのなかの発信通話時間(週当たり)
(図説 日本人のテレコム生活 1991 NTT出版、1991より作成)

19. ラカンの理論についての詳細は、以下の論文を参照されたい。鬢櫛久美子、「『教育的関係』再考Ⅱ—J.ラカンの理論を中心に—」、名古屋柳城短期大学紀要第23号、2001年度、pp.73-84。